タイヤル族の病気の概念

山　路　勝　彦

1　病気の民俗概念

タイヤル族の慣習法には，村落秩序の根幹をなす掟を破ると，天罰が降り注ぎ，村人が病気や怪我をするという考えがみられたが，その慣習法の意義についてはすでに論じておいた〔山路勝彦 1986〕。慣習法の研究を通してもわかるように，いくつかの病気の原因は神意のせいにされていたのが旧慣時代の特徴であった。もちろん，病気の原因はその性状によって種々に捉えられていたし，村人によって病気と認定されたものの中には，神意によらないものも多数ある。本人の不注意による病気・怪我もあるからだ。

一度，身体上の異変が生じると，その原因を求め治療行為がなされる。旧慣時代を振り返ってみると，タイヤル族のばあい，病気の原因は病原学的には考えられておらず，また治療行為は近代医学の方法とは異質であった。なによりも呪術が優先するのであった。しかしながら，その呪術行為が病人に慰みと安らぎを与えるものなら，それは秀れた治療行為といわねばならないだろう。

だが，旧慣時代にみられた呪術行為は現在ではほとんど衰退していて，それを目撃することは不可能である。衰退していった理由はいくつか考えられる。日本統治下では呪術的行為は取り締まられていたのだが，現代ではさらに一層，このような呪術行為は生息しにくくなっている。さまざまな情報手段を通して医学的知識が導入されているし，そして何よりも，戦後になってあまねく浸透したキリスト教は徹底的に呪術行為を排撃したからである。このような事情のため，タイヤル族の伝統的な呪術行為を復元するには，今では記憶に残っている伝承を頼りにしなければならない。

しかしながら，病気に対する観念自体はさほど変化を受けていないようである。タイヤル族にとって病気とは，身体の痛みに由来する生理的現象にほかならず，感覚器官の損傷の問題と考えられていたのだが，そのような病気に対する認識は今もなお，基本的には変化していないようにみえる。このような点に留意しつつ，マイリナフ地方のタイヤル族が病気一般についてどのように考えていたのか，検討してみることがここでの目的である。

病気の概念について触れるにあたって，まずはタイヤル族の民俗語彙の検討をしておく必要があるが，そのさい，二つの点に注意しなければならない。その第一点は，日本語でいう「病気」概念と，タイヤル族のそれに関する民俗語彙には，ことばの外延においていくばくかの相違があること，第二点は，「精神病」に対する位置づけが異なっていることである。

マイリナフ地方の民俗語彙を最初に取り上げてみよう。この地域には，モハール mohaal（マオハ maoha）という語彙が聞かれ，それには次の三通りの使い方がみられる。

1．「痛い」の意味。たとえば，人につねられたとき，日本人なら「痛い！」と叫ぶのだが，マイリナフ地方の住民は，「モハール！(マオハ！)」と叫ぶ。怪我したときの「痛み」が，「モハール（マオハ)」である。

2．「病気」の意味。上にみた1の語義に由来するのだが，身体上の損傷によって痛みを感じた場合，その疾患を指す。いいかえると，怪我や内臓疾患に起因する身体上の損傷を指していう。

3．「病人」を指していう。身体上の損傷を受けた本人を言う。ただし，病人の中でも，とくに長患いの病人に対しては，マタケヤケル mataqeyaqel と称する。語彙的には，短期間の病人と長期間の病人とでは区別がみられ

るのだが，この区別はマイリナフ地方の住民にとって大切である。これに関連させて，急病に対する特別な認識もみられたこと，すなわち，急病は呪術的な観点から説明されていたことも知っておく必要がある。

以上みてきた語釈のうち，二番目の用法は日本語の病気の概念と重なりあう[1]。そこで，この二番目の用法でのモハールを病気と訳すことにしよう。ただし若干の注釈が必要であって，それというのも「精神病」の位置づけをめぐって日本とタイヤル族とでは，顕著な違いがみられるからである。

マイリナフ地方には，マガ・オットフ maga-otox ということばが聞かれる。オットフ otox とはおおよそ超自然的存在全般を指し[2]，したがってその語を直訳すると，「魔物にとりつかれている」という意味になるのだが，ここでは精神障害と訳しておこう。多数の村人の日常行動と比べてみて，逸脱した行動と判定されたとき，たとえば，理由もなく一人で笑い出してみたり，ブツブツ一人話をしてみたり，あたりはばからずに大声をあげ奇声を発してみたり，現像を取り上げてみたとき、おおよそ多数の人たちとは異なるしぐさを常にする人に向けて，この語は発せられる。

むろんのこと，大多数の人たちの行動は慣習に則っていて，平準的なるものを志向しているから，彼らに対してはマガ・オットフとは対照的な表現がみられて当然である。マガ・オットフとの関連でいえば，大多数の人たちは，バラヤック・ナ・ツォコレック balayaq na tsoqoleq（よい・の・人）といわれる。それは，「良い人」，「正しい人」を意味するが，「常軌を逸しない人」という意味合いがそこには込められている。

1985年夏現在，マイリナフでは村人からマガ・オットフとあからさまに認定された者が，３名いた。一人は20代の若者で，酒乱の父に悩まされ，その結果，分裂病的行動をとるようになったもので，よそものに危害を加えるため，親たちは一時，大都市の精神病院に入院させたことがある。他の２名は母とその子であり，若い時はおとなしく，村人一般と違いはなかったけれども，母は子を生んだときから，息子は兵役に行ったあとから，それぞれ，しだいに態度がずれはじめ，無表情になり，感情や意志の面でも障害が生じ，とんちんかんに対応するようになったので，マガ・オットフと判定されてしまった。なお，この二人の近親にもさらに一人，同様な精神障害がみられることから，この母子のばあいは遺伝（ロヘン loheng）によると噂されている。

精神障害に近い概念だが，明らかにそれとは区別されている概念に，マトカカリガ・ア・トノフ matkakaliga a tonox がある。直訳すると，「頭（トノフ tonox）が錯乱している」ということで，おおよそのところ，悩みごとのために錯乱状態に陥ったときに使われる。さらに軽い用法としても，たとえば，忙しいときに仕事が多すぎて，どれを先にしたらよいか迷って頭が混乱状態にあるとき，この語は用いられる。その他にも，比喩的にいって，酒乱に対して，あるいは度を逸した無作法に対しても適用されるのだが，いずれも特定の状況下での現象が問題とされるのであって，時が経ち，悩みなどの懸案事がなくなれば，また「バラヤック・ナ・ツォコレック」に戻るとされ，この点で精神障害（マガ・オットフ）とは異なる概念とされている。

しかしながら，一過性的な錯乱状況も慢性化していくと，精神障害になると考えられていて，こうしてみると，この概念は精神障害へ至る移行過程に位置する概念ということにもなろう。精神障害には，村人の説明によれば，先天的なものと，環境要因によるものと二種類存在しているが，この錯乱状況ということに関して注目してみると，大多数の人たちも状況次第では精神障害になりうると認識していたことになる。

精神障害は，けっして病気，つまりモハールとは考えられていなかったが，その理由は，いうまでもなく痛みという感覚的な刺激を伴わないからである。それは身体上の損傷を引き起こすわけでもなく，身体上の損傷が引き起こしたと考えられているのでもない。もちろん，神経系統の損傷に

1)『広辞苑』によると，病気とは「生命の全身または一部分に生理状態の異常をきたし，正常の機能が営めなくなる現象」とある。

2) 神観念，もしくはオットフの概念については別の論考を予定している。

よるという認識は，旧慣時代にあったはずもない。こうして，どんなに気が狂っても，文字通り「痛い！」という感覚を伴わないので，精神障害は病気の範疇に帰属することはなかったのである。

精神障害を病気と区別する基準は痛み感覚の有無に基づくものであったが，日本語とタイヤル語とを比較してみると，痛み感覚についての比喩的表現は両者では著しく違うのに気づく。この落差を認識することは，双方の文化をともに理解するにあたって，きわめて重要である。日本語の「気持ち」，「心」に相当するマイリナフ地方のことばはキシレック kisileq であることを知っておくとして，次の表現を取り上げてみよう。

balayaq a kisileq 気持ちが良い。

aqeh a kisileq　気持ちが悪い。

これら二つの表現は日常生活でよく聞かれ，文字通り気持ちや気分が良い（バラヤック balayaq），あるいは悪い（アケー aqeh）ことに対する謂である。しかしながら，次の表現，すなわち，

mohaal a kisileq

という用法は，タイヤル語の世界では不自然である。日本語での「痛い」という表現は，感覚的には痛くなくても様々に比喩的に使われ，「心が痛い」ということで悩みごとの深さを言い表わすのであるが，タイヤル語では痛みは感覚器官の問題として扱われ，したがってこのような比喩的に表現する機会は少ない。もっとも，悩みが多くてそのため頭（トノフ tonox）がズキンズキンするときなどは，次の表現，すなわち，

mohaal a tonox 頭が痛い

と使われるけれども，抽象的な存在である「心」が感覚的に痛むわけではないので，mohaal a kisileq（「心が痛い」）という表現は不自然とされるのである。ただし最近では，中国語の「心很疼」に対応させて mohaal a kisileq という表現が出現したが，それはあくまでも最近に生じた直訳的表現にすぎず，伝統的なものではない。日本語の「心が痛い」という表現にもっとも近い言い方は，こうして次のようになる。すなわち，

puyuh a logologon ro aqeh a kisileq（多い・が・心配・そして・悪い・が・気持ち）

つまり，「心配ごとが多くて，気持ちが悪い」という表現をとるのである。

日本語は身体表現のきわめて豊かな言語である。「身が固まる」，「身が持てない」，「身に余る」，「身につく」，「身になる」，「身も蓋もない」，「身を入れる」，「身を削る」，「身を焦がす」，「身を粉にする」，「身を尽くす」，「身を抓む」など，身体に基づいた比喩的な表現はことのほか発達している。そして抽象的な存在である「心」が「温かく」なったり，「冷たく」なったり，はては「痛く」なったりするのである。こうした文化体系の中に育った者としては，タイヤル語にみられる身体表現の乏しさは，好対照な印象を受ける。

日本語では，「痛い」という身体感覚が，比喩的に使われ，「心」にまで適用され，したがって「心が痛い」という表現が成立するのだが，タイヤル語の世界では，このような比喩的表現は不適切とされる。タイヤル語では「痛み」とは直接的に身体に関わり，第一義的に感覚器官に属する事柄である[3]。それゆえ病気とは，まさしく身体上の損傷に関わる概念として認識されることになり，かくして病気になることは，

mohaal a hehehe 身体が痛い

ということであり，あるいは，

3) 皮膚をつねって痛いとき，日本人なら「痛い！」と叫ぶところ，タイヤル族では「モハール！」と叫ぶことは，すでにみておいた。だが，感覚器官が刺激されたとき，その反応を表現することばは，文化の違いによって微妙にずれあっている。たとえば，次の表現をみておきたい。

masyagusou しびれる（正座して足がしびれたとき）。

makakat　くすぐったい（足の裏をくすぐったとき），および，かゆい（皮膚病で皮膚がかゆく，ボリボリかきたいとき）。

つまり，「くすぐったい」と「かゆい」とが同一語彙で表現されていたのだが，味覚の表現も文化によって異なることも付け加えておきたい。すなわち，

sikasyagusou すっぱい（梅干の味）。

tatimo　塩っぱい（海水の味）。

larubing　甘い（砂糖の味）。

magihou (mama'a) 辛い（唐辛しの味），および苦い（薬草の味）。

つまり，このばあいは「辛い」と「苦い」とが同一の語彙で表現されているのに注目されることだろう。

aqeh a hehehe　身体が悪い
maowai a hehehe 身体が弱い

などという字義通りの表現をとることになる。これに対して健康を意味する語は,

laoqah a hehehe 身体が強い

であるが，ラオカー laoqah とは力の強いことを指し，文字通りそれは，「身体（へへへ hehehe）が強い」ことの謂であり，「たくましい身体」を意味している。そして，病気の治ることは,

balayaq a mohaal

と表現するが，すでにみたように，バラヤック balayaq とは「良い（良くなる）」の意味があり，さらには「治る」の意味としても使われ，したがって文字通りに解釈すると「痛みがとれる」ことを指している。こうした事柄を知ったうえで，病気に対するマイリナフ地方の観念をこれから取り扱っていくことにしよう。

2　病気の種類と名称

日本時代における衛生思想の普及は，伝統的なタイヤル族の医療体系に重要な変化をもたらしたし，それにもまして最近では，学校教育のいっそうの普及，テレビなどの情報手段の発達を通して，新しい病気観がもたらされ，かくして病名とその病因についての知識が広く知れわたるようになった。テレビの宣伝では，日本とまったく同じように，製薬会社関係の映像が大量に流されているので，薬についての知識も豊富である。ガン，脳出血，心臓病に関する知識も普及していて，胆石，腎臓結石などの病気で都市の病院で手術を受ける患者もみられ，こうした事実を見聞きする限りは，日本の都市民とさして変わる様子はない。

しかしながら，伝承を復元していくかぎり，日本人の到来する以前のタイヤル族の医療知識は，今とはかなり違うものがあった。呪術的な治療方法こそはその顕著な特色だったけれども，その他にも，病気に対する病名が乏しいこともその特色の一つだった。今でこそ，「肝硬変」，「狭心症」，「胃かいよう」，「脳出血」などの病名が，日本語あるいは中国語を通して知れわたっているのだが，タイヤル語自身にはそうした名称はみられない。いうまでもなく，そうした名称は彼らにとっては外来語にほかならず，タイヤル語で表現すれば，せいぜいのところ，個々の臓器に基づいた名称として，それぞれ次のような言い方があるにすぎない。

mohaal a saiq　肝臓病　(saiq＝肝臓)
mohaal a qaqaliyat 心臓病　(qaqaliyat＝心臓)
mohaal a aqhol　胃病　(aqhol＝胃)
mohaal a tono　脳病　(tono＝脳)

現代医学では，肝臓，心臓，胃，脳の病気は病理学的に細かく専門化した名称で呼ばれているのだが，タイヤル語ではそこまで専門化した名称はほとんど取り入れなかったし，そればかりか，上に記した個別的な内臓器官の病名ですら，日本が到来するまでは存在していなかった。古老たちは述懐しつつ，古くは身体の内部が痛んでも，どの器官が病んでいたのか正確には知らなかったはず，と主張する。たとえば，今では「肝臓病」についての知識があるにしても，昔は，吐き気があり腹部が痛んでもどの部位から発する痛みなのか，適確に知る由もなかったので，「肝臓病 mohaal a saiq」という名称自体がなかったというのである。吐き気がして腹部もしくは胸部が痛んでも，どこに病巣があるのかわからなかったので，「胃病」という名称はなかったと説くのである。

したがって，内臓器官の病んだときの病名といえば，せいぜいのところ，次のように大まかに表現するにとどまった。

mohaal a hobo（hobo＝下腹部）
　下腹部の病を総称していう。下腹部が痛んだり，下痢などの症状がでたときにいう。
mohaal a nabowas
　(nabowas＝へそから上の腹部)
　上腹部が痛む病気。
mohaal a putsigahau
　(putsigahau (putsigapaq)＝胸)
　胸部やその周辺が痛む病気。

すでにみたように，病気とは「痛い」ことであった。しかしながら，その痛みが体内のどの器官より発しているのか，はっきりと認識されていなかったので，個々の内臓器官に因んだ病名がないのも，当然であろう。それに対して，外部器官の痛みは，比較的簡単にその痛みの部位を知りうるから，器官ごとの個別化した名称があるのもうな

づける。とはいっても，炎症・熱(kilox)・膿(ngahoq)などの病変部分の症状をもって命名されることは少なく，それらの症状も「痛み」という現象に還元されるから，そうした疾患の名称は，基本的には上にみたような，たとえば「腹痛」という表現と同じである。例を挙げておこう。

mohaal a ngaqowaq（ngaqowaq＝口）
おおよそ口の中のすべての病変をいう。

mohaal a ngohou　（ngohou＝鼻）
蓄膿症はじめ鼻の病気をすべていう。

mohaal a ginox　（ginox＝歯）
maqlinox と言い代えてもよい。小さい虫が歯について生じるのだが，その他にも，冷たいものなどを食べて歯がしみるときも，この病気とされる。

mohaal a papak　（papak＝耳）
耳の中が痛いときにいう。とくに内耳から膿が出るときは，matnoq という表現がある。その他，耳下腺炎に対してもいうが，このばあいは，その縮約した形の mapopok という名称を使う。

mohaal a raoyaq　（raoyaq＝目）
あるいは maka-raoyaq ともいう。トラホームをはじめ，目の病気をすべて指す。

mohaal a aqtsou　（aqtsou＝喉）
喉およびその周辺の病気をいう。

mohaal a homma　（homma＝舌）
舌の病変をいう。

mohaal a pinobowan（pinobowan＝関節）
関節を指すことばは他にもあるが，日本語でいう関節炎に対しての一般的な表現は，かくして「関節痛」となる。

mohaal a pageh　（pageh＝怪我）
この表現は奇異に感じるかもしれないが，怪我は痛いので，やはりモハールである。mohaal a kinatsan na bueqa と表現すれば，「竹（ブエカ bueqa）で切られたところが痛い」ということだが，このばあいの怪我もやはりモハールである。

日本語では，怪我と病気とは異なる概念であるが，タイヤル族ではともに感覚的には「痛い」わけであるから，モハールという概念で捉えられて不思議はない。以下に列挙する疾患は，やはりモハールといわれている。

mapoho　骨折
ふつうは，mapoho baqne（折れた・骨）と表現するが，さらに詳しくいうと，たとえば，mohaal a kokoi ka mapoho（足 kokoi が折れて痛い）と使う。

masi-oqo　打臼

malahong　うちみ

maba'ba　腫れ

そして，次の病気をこれらに付け加えておこう。

pusibuka kokoi (qaba)　足 kokoi（手 qaba）のあかぎれ

masihebil　とくに足の裏のあかぎれ

mabaqeh　かいせん

mainao　水虫

masitana　痔

matsuling　やけど

sanraqaan　食中毒

malalamat　てんかん

maholioi（36ページ参照）

mabihen（37ページ参照）

以上までは，マイリナフの住民にとってきわめてありふれたモハールの例である。外傷のばあいはその患部の状況を考慮して命名することがしばしばみられるが，それ以外，とくに内臓疾患では，疾患部分の症状によって病名が名付けられるというよりも，おおむね器官の名称をそのまま援用して「痛み」を表現していたのが，実状といえる。ところで，これら疾患の中でも伝染病 mohaal ka komo'o（komo'o＝伝染する）は，その特異な症状からしてさまざまな病気の中でも特別な位置を占めていたようである。そのことは，病名を検討してみても，病気が生じたときの村人の対処の仕方をみてもすぐに理解される。ひとまず，病名を挙げてみよう。

mohaal na lahowal	大きい病気（lahowal＝大きい）。今にいう天然痘。
wahan na bo'ol (bongut)	wahan＝かかっている。bo'ol (bongut)＝ひいた。

	つまり，呼吸器系の病気，いいかえると感冒のこと。
mabilbil	震えるの意味。すなわち，マラリア。
pas-aqtsou na ramoh	aqtsuo＝のど，たん。 ramoh＝血。 結核のこと。
mohaal na matanah	matanah＝赤い。 はしかをさす。
qote na ramoh	qote＝大便。 赤痢，コレラなど血便の出る伝染病。

耳下腺炎（おたふく）についてはマポポクmapopokとよばれていたことをすでに記しておいたが，それと並んで，赤痢，天然痘などの重い流行病が，マイリナフで特別な観点から考えられていたことは，その病気が流行したとき，村人がどのように対処していたのかをみると，よくわかる。たとえば，天然痘の場合を取り上げてみよう。日本が到来する以前において，もっとも恐れられていたのは天然痘であって，熱を出して処方も空しく亡くなっていく有様は，まさに「大きな病気」というにふさわしい。しかも，その伝染力に対する恐怖から，ひとたびこの病気の蔓延したときは，その予防のため，村あげての移住が試みられたほどである〔山路勝彦　1984：69〕。

これら伝染病をみて気付くのは，症状の出方に応じて病名が付けられていることである。今でいうコレラ，赤痢はともに同一の名称で呼ばれているが，それらはいうまでもなく血便という症状の類同性に基づき，同一症状ゆえ同一範疇とみなされた例である。症状に従って病名が与えられるのは，はしか，結核，マラリアのばあいも同じで，いずれも細菌についての認識はなく，具体的に観察された症状に基づいて命名していたことになる。

3　病因についての考え方

おおよそ病気というものが，痛みという症状を指していて，とくに内臓疾患についてはその部位についての認識が漠然としていた以上，その原因についての知識も当然ながら近代医学での病原論とは異なっていたことは，いうまでもない。結論的にいうならば，多くの，しかも重い病気のばあいには，超自然的存在にその原因が求められていた，ということができる。

ひとまず，病気にかかる原因について，いささか便宜的な分類に走るようだが，次のように整理しておこう。

1．本人の不注意，もしくは不養生や酷使によるもの。
2．超自然的な存在によって引き起こされるもの。
3．遺伝的なもの，不明，その他。

やけどや打臼など，明らかに目に映りしかも因果関係のわかる外傷は，個人の不注意によるとされている。本人が気をつけてさえいれば未然に防げたからである。これに対して，関節炎や神経痛は必ずしも不注意によるものではない。今の老人の多くはこの病気の持主であるが，生まれつきの体質，仕事のしすぎ，栄養分の不足などにその原因はあると考えられている。とりわけ，若い頃の体の酷使が関節炎を起こす遠い引金であると，地元では説かれている。元来，重労働とは縁がなかったタイヤル族も，日本時代になって造林や伐採，そして水田耕作と激しい労働をするようになり，かくして現在の老人たちは若い時から身体を酷使していることになるのだが，その積年の疲労が原因である，と彼らは考えている。

ちくのう症，内耳炎，そして虫歯は不養生による病気であり，かいせんは体の汚れ、つまり皮膚を不潔にしておくことにより，また水虫は長時間，泥水の中につかり，足指を不潔にしておいたためにできた病気とされている。体の酷使とならんで，こうした不摂生，もしくは不養生に起因する病気はけっして少なくない。

遺伝的と考えられている病気には，てんかん（マララマットmalalamat）があるが，その他にも，マホリオイmaholioiと称されている，痛風状の一種の関節炎がある。関節から始まり，しだいにその周囲が腫れあがって歩行困難になる病気であって，こうした症状からいって，このマホリオイはふつうに見られる関節炎mohaal a pinobowan

とは概念的に区別されている。付け加えていえば，それには慢性的に激しい痛みを伴うという特徴がある。この病気の原因は不明だが，特定の近親者の間に続発するという経験的知識から，遺伝（ロヘン loheng）によるとされている。

マビヘン mabihen と呼ばれる．体全体が腫れ上がる病気は，たまにしか見ることはできない。足先から腫れていって，ついには体全体が腫れ上がり，そして落命してしまう病気で，今にして思えば「腎臓病」とされている。遺伝によるわけではなく，また超自然的な存在によって引き起こされたわけでもなく，昔はその原因がわからず，ただ漠然と体内の異常によると考えられていたにすぎない。これは伝染性のある病気とされ，触ると移るとみなされていたので誰も近寄ろうとはせず，その病人には特別な小屋を建ててやり隔離するのが，予防法であった．

病気の原因を超自然的な存在に結び付ける観念は，日常生活の中でもしばしば見受けられる現象である。今まで何でもなかったのに，急に腹痛がおきたり，頭痛がしてみたりする経験は誰しもがもっているにちがいないが，健康であった者が突然に痛みを訴えるのだから，本人はもちろん，周囲の人々をさえ不安に陥れて当然ということになろう。

急激な腹痛，頭痛は，いろいろな原因で起きる。タイヤル族では鳥占いが盛んであったけれども，占いで凶と出たのに無理して外出すると，往々に腹痛などに襲われるし，他人にあげた食べ物を黙って食べたら，やはり腹痛になるともいわれている。いずれのばあいも，天の罰にあたったと解釈されていて，人々は次のように，

tomoling a baihou

（tomoling＝指す，baihou＝風）

というように表現して，大変に恐れていた。直訳すると「風が指す」ということだが，このばあいの「風」とは自然現象としての風ではなく，「悪い神 aqeh a otox」のことを指示している。すなわち，「悪い神」に出会って腹痛がおこったとされているのであり，超自然的存在が引き起こした病いの一例である。

同じようなことだが，腹痛などの急性の病気，とりわけ七転八倒するような突然の苦しみは，神の障りによるとされ，以下のように，

saang na otox　（怒られた・に・神）

もしくは，

tsinbou na otox（打たれた・に・神）

というように表現される。いうまでもなく，病気の原因が超自然的存在に求められた例である。もちろん腹痛が腐食物に原因するばあいもあり，このような食中毒では因果関係がすぐに指摘されるのだが，そうではなく，今まで健康だった人が急に腹痛や頭痛をおこせば，不安に駆られるのであって，そこに超自然的な存在との関わりが登場することになる。

すでに慣習法の意義について述べたさいに力説しておいたことだが，タイヤル族全般にわたって次のような信仰が聞かれたことを，ここでも再び確認しておくべきだろう。それは，姦通，殺人，離婚は掟（ガガ gaga）に対する重大な侵犯であり，とくに姦通，殺人などの事件を惹き起こしたのに隠匿しておくと，神の怒りを買い，その結果は，掟を共有している人たちを不浄に陥れてしまい，かつ病気にさせてしまうという信仰のことであった。長らく病気を患ったり，崖から落ちて大怪我をしたりしたばあい，村人は原因不明の災厄こそは神の怒りに触れたためと考えており，かくして病気の原因として，ここでもまた超自然的存在が登場するのである〔山路勝彦　1986〕。

具体的な症状を伴う病気について考えてみよう。風邪（感冒）は日常生活でいつもみられるありふれた病気であるが，その原因はやはり超自然的存在に求められていて，「風（バイホウ baihou）」つまり「悪い神」のせいに帰せられていたことは，急性の腹痛のばあいと同じである。風邪と同じく流行病であるコレラ，赤痢，天然痘も，「風」，つまり「悪い神」のせいと考えられていたことは，もはや説明する必要もないかもしれない。激しい苦痛，強い伝染力，死ぬ危険性，こうしたことで恐怖を呼び起こすこれらの病気は，日本時代になって病原菌によるものだと教えこまれたけれども，それ以前ではまったく別の観点から，その原因が考えられていた。

感冒にしろ，天然痘，コレラ，赤痢にしろ，こうした流行病は「風に吹かれてやってきた inalas na baihou（もってくる・が・風）」といわれてい

る。ちなみに，感冒 wahan na bo'ol（あるいは天然痘 mohaal na lahowal）について村人の表現をかりれば，次のようである。

inalas na baihou ko wahan na bo'ol,

inalas na baihou ko mohaal na lahowal.

「風に吹かれてやってきた病気」とは，言いえて妙な味あいのする表現であるが，もう繰り返すこともなく，このばあいの「風」とは，自然現象としての「風」ではなく，「悪い神」のことであって，結局は超自然的存在に病気の原因が求められていたことになる。当然ながら，病気の原因は身体外にあって，外部からの作用で身体の変調が生じたというように考えられていたわけである。

この他に，超自然的存在によって引き起こされた病気として，さらに呪術が原因となった，次のような例をみておくべきだろう。それにはいくつかの類例があって，その一つは，妖術（マホウネ maxoune）によってかけられたヘナホネ hena xone と称される病気である。妖術についてはすでに触れておいたが，〔山路勝彦　1986：79〕，この病気のばあいは痛む部位，痛みの程度，症状などは人によって一定していない。これにかからない予防策として鉄類をかめばよいと伝承されているが，ひとたびかかると死に至る場合も多く，また病気を患ってもそのかけた張本人に懇願し，治してもらうより回復の方法はない。

他の一つは，homgob na owai といわれ，直訳すると「人を弱くする呪法」とでもいうべきものであって，大体は以下のような内実を伴っている。すなわち，作物を植えた自分の畑の上を他人が勝手に通り，作物を荒らしてしまうことが頻発すると，畑の持主は呪文を込めた茅をその畑に立てておき，もし誰かがそれに触れると呪術がきいて，その後だんだんと衰弱していくという経過を辿るものである。病気にかかる部位，その痛み，症状などは人によってやはり異なるし，謝罪をしなければ治らず，だんだんと衰弱して死ぬと恐れられていた。もっともここに挙げたこうした呪術に基づく病気は，旧慣時代でもめったにみられなかったというが，いずれにせよ，病気が超自然的存在が原因で，外部からの作用で生じた例である。

4　呪術，占い，そして病気の治療法

日常生活での占いとして，日本では姓名判断，手相占い，人相占い，はては血液型による性格判断など，他方面にわたる判事物がみられるけれども，タイヤル族では，夢判断と鳥占いこそが，たいていの村人に知れわたっていて，日常生活でも盛んに利用されていた占いの方法であった。夢判断についてはすでに触れておいたが〔山路勝彦 1986：69〕，それを補足しながら，俗信として毎日の会話に登場する例を簡単にみておこう。

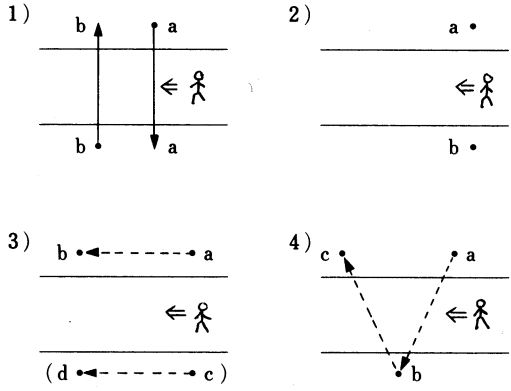
人から物を貰う夢は一番よい夢———山で獲物がたくさん取れることの予兆。

人に物をあげる夢はあまりよくない夢。

山刀を落した夢は不吉。

一番悪いのは物を失くした夢————近親者に死人がでることの予兆。

タイヤル族の夢判断の具体例はすでに報告があるので〔田上忠之　1935：44—46〕，詳しく語る必要はないのだが，総じていえば，「物を貰う夢」と「物を失くす夢」とがそれぞれ吉と凶を代表する例であったこと，その他の夢でもおおむね予兆として活用されていたこと，さらに神託をうる手段としても利用されたこと，これらの用途があったことを指摘しておく必要がある〔山路勝彦 1986：69〕。



第一図　鳥占いの方法

（a，b，c，dはそれぞれ別の鳥を表わす）

鳥占いの存在も，日常生活を呪的色彩でふちどるのに大いに貢献していた。朝早く，人の起きない前に道端に出て，みそさざえに似たシシレク

sisileq という小鳥の鳴き方で吉凶判断することを見聞きすることは，今でも不可能ではない。占いに使うこの鳴き方には四種類の類型があり，それぞれに吉凶が割り当てられている。第一図を参考にしながら，説明してみよう。

1．lum'ax kabahaneq（横切る・道）：人の歩く前を，右から左に，あるいは左から右に鳴きながら横切ったとき。これは大凶である。昔なら無理に首狩りに行ったら，犠牲者がでたし，今でも狩猟に行っても獲物が取れないし，崖から落ちたり，急に腹痛を起こしたりするという。

2．miyalau：鳥と人とが同位置にいて，かつ鳥が両側で一緒に鳴くとき。これは，1ほど凶ではなく，むしろ半吉半凶。しかし，狩猟で獲物は少ししか取れない。

3．matantong：道のどちらかの側で鳴いて，すこし行くとまた同じ側で鳴く。これも1ほど凶ではなく，むしろ半吉半凶。狩猟では獲物は少ししか取れない。

4．mogotsiyoq：人の歩く前を，道の右側（あるいは左側）で鳴き，すこし行くと左（あるいは右）で鳴き，さらに行くと，今度は右（左）で鳴くとき。これは大吉である。狩りに行っても獲物は豊富である。

戦後におけるキリスト教，とりわけ長老教の浸透は伝統的な宗教観念に重大な変化をもたらし，呪術的な信仰に支えられた慣習法の世界を根底から覆したのであるにしても，人々はこのような縁起をかつぐ習慣まで放棄はしなかった。しかしながら，全体的にいえば，今までのような呪術的信仰に取り巻かれた環境の中で日常生活を送っているとは言い難い。だが旧慣が支配的だった時代では，呪術的世界とは切っても切れない関係に置かれていたのであって，病気治療にさいしての呪術の関与は著しいものがあった。当時では，病気とは生命にとって最大の敵であり，この大敵を前にしての治療行為とは呪術的方法が中心であった。

確かに，その当時でも，外科的あるいは内科的処方が皆無だったというわけではない。しかし，日本が到来するまで，タイヤル語には「薬」に該当することばは存在していなかった。熊や猿の肝は漢人社会では「薬」として珍重されているし，草を煎じて飲むこともよくみられることだが，こうした慣習も旧慣時代のタイヤル族にはほとんど知られていなかった。下痢をしたときはバンザクロの実を食べると治るとされ，実行されているが，これは平地の漢族と接触して教えてもらった知識であり，最近の事柄に属す。現在では薬の意味としてイヨ iyo なることばが聞かれるけれども，これは福建語の「薬（ioh）」に起源をもつことばであって，日本時代に使われ出したにすぎない。

このような事情から察しがつくように，病気が発生したさい，その治療法はきわめて限定されたものであった。軽症のばあいは，内科的もしくは外科的方法による治療がわずかにみられたが，重傷や慢性の病人に対して取られた方法はもっぱら呪術的であった。軽症のばあいを取り上げてみよう。たとえば食中毒のばあいだと，薪の炭を叩いて粉々にしたものを生水に溶かし，大量に病人に飲ませることがその治療法であった。いうまでもなく大量に飲ませることで，胃の中の食べ物を吐き出させたわけである。

やけどのばあいは，野生バナナの腐りかけて水分を含んだ根で湿布することが有効とされていたし，異物が目にはいったり，刺さったりしたときは，かずらの汁を目の中に入れ，涙とともに流すことが試みられていた。かいせんを患ったときは，この村の近くにある温泉に入浴すること，そして止血法としては，かずらの芯をかじってそれを傷口に当てること，こうした方法が，経験的に学んだ知識として，効果ありとみなされていた[4]。

だが，治り難い病気，慢性の病気，あるいは重病に対してはもっぱら呪術的治療が主流を占めていた。そしてその呪術的治療方法も，症状の程度にしたがって何種類か存在していた。以下に示す

4）このほかにも，打身にさいして呪医のみは特別な治療法を心得ていたという。それは次の方法であって，まず，鉢，鍋などに湯を入れ，その中にツァガミと称する背の低い草の葉を浸す。それを取り出し，祈祷しつつ，その葉をもんで患部にこすりつける。これを何回も繰り返すと湯は赤くなるといい，その赤さとは悪い血が流れ出た証拠とされている。ただし，この治療法をふつうの人がやっても，湯が赤くならないし，効果はないという。けれども，この呪法を正しく記憶している古老を見つけることは，今日では難しい。

のは，そうした呪術的治療方法である。

1　トモナバーイ　tomonabaai

この呪術に際しては，茎と葉の付いた山イチゴを用意する。それに布を巻きつけ，そしてその布を燃やして病人の額にその灰をつけ，かつイチゴの茎を病人の体にこすりつける。これは「悪い神」と出会って腹痛が起きたときには即座にする呪法で，治療行為の中では一番軽便な方法である。鳥占いのとき，変な鳴き方をしているのに無視して行くと，腹痛が起こったりするけれども，そのばあいも，この呪的方法で治療する。

2　ホムゴップ　homgop

この呪術法はきわめて一般的で，すでに慣習法について論じたときに概要は記しておいたのだが〔山路勝彦　1986：69〕，とくに長患らいの難病に対して試みられる。この行為者は，特定の訓練を受けた人であって，おもに女性がなるが，その能力はけっして世襲的に継承されることはなく，すでに定評をかちえている呪医に弟子入りしてその方法を伝受してもらうことによって，それになる道が開かれる。しかしいかなる意味でもシャーマニズム的要素は認められないので，このホンゴップする人を呪医と捉えておこう。さて，その方法の概略は以下の通りである。

この呪医はまず竹と鉛玉（あるいは陶製の玉）を用意し，そして病名の診断（ティシラアン tisilaan）をする。呪医は，蹲踞の姿勢をとり，竹を膝に挟み，その竹の上に鉛玉を載せ，病名を唱えながら体を揺する。その病名とは，呪医のみが知る名称を使い，日常語ではなかったので一般の人はわからなかったというが，そのさいに鉛玉が落ちたら，その占いは神が関知しておらず，落ちなかったら，そのときに口にした病名こそは神が認めたことを意味する。こうして，病気の箇所が神意に即して確定すると，病気も治りやすくなる。

このあと，呪医は病人に向かって全快するように祈祷する。そして，全快したらツミヨック tsumiyoq（神に捧げる，の意味），つまり奉献をする。生米，豚肉の切れ身，鶏の心臓・とさかなどを神に捧げ，感謝し，一連の呪的治療は終わる。

3　タカリモ　takalimo

ホンゴップしても治らない重病人に対しては，さらに一段と利目の強い呪法を施さねばならない。いわば，特効薬としてのその呪法は，タカリモと呼ばれている。その方法を概略してみよう。

まず，鉢か鍋を用意し，一本の長い茅の葉をその中に漬ける。そして，その茅の葉を病人の頭上に振り，また水に漬ける。そうすると，茅の芯の部分から泡が出てくる。この泡は「悪い神 aqeh a otox」といわれていて，まさしく病気の原因である。この泡を一粒づつ潰していく。最後に残ったものがもっとも質の悪いものであって，もしそれも浮き上がって消えるなら，病気も治るとみられているし，消えないなら，神が許していないので治らないという。

泡を潰したあと，呪医は病人に向かって，「悪い神」が離れるように祈祷し，こうして全快すれば，生米，豚肉の切れ身，鶏の心臓・とさかなどを神に奉献して感謝し，一連の呪的祈願は終了する。

このタカリモのときに最後まで残った水泡は「悪い神」と表現されているが，このばあいの「悪い神」とは，人間に不幸とか不運，あるいは害をもたらす超自然的存在すべてを指している。そして病気が治るも，あるいは死に至るも，すべて超自然的存在のなせる業であって，もし治れば，その病人は運命が良かったのであり，だめなら運命が悪かったことになる。「運命が良い」とは，

balayaq na otox（良い・の・運命）

そして，「運命が悪い」とは，

aqeh na otox　（悪い・の・運命）

と表現するのだが，こうした語彙の用法からしても，病人の生死は超自然的存在，つまり神の掌中にあり，病気の治療とは運・不運の問題に終局的には帰結されていくのが理解されることだろう。不運にも病気にかかり，しかも神は呪医の願い事を聞きいれなければ，その病人は死ぬよりほかはないこととなり，結局は運命が悪かったとみなされてしまう。そうならないように，旧慣時代にあっては人々は神の庇護を求め，ひとたび病気になるとこのような呪法によって治療し，痛みを和ら

げ，心の平安を取り戻していたのである。もう繰り返す必要はないかもしれないが，重い病気の原因が超自然的存在のせいに帰せられていたのであれば，その治療法自体が呪術的であったことも，痛みを除去してくれるよう必死に神に祈った現実も，当然すぎるほど当然であったといえよう。

しかしながら，病気治療に関する呪術的行為は，最近のさまざまな社会変化の中でまったく衰退してしまった。もっとも鳥占いなどの縁起をかつぐ習慣は，今でもふだんの生活で見聞きすることができる。だが，治療という実効的な結果が必要とされる領域では，あきらかに旧慣時代とは違った現象が起きている。ホンゴップやタカリモは，もはや見ることが不可能である。

「薬」によって病原菌に対抗するという考えが存在しておらず，しかも病気の原因が超自然的存在に求められていれば，その治療法の主流が呪術的行為であっても当然のことであるのだが，これらの呪術行為は今ではおおかた消失してしまった。その理由はいくつか挙げられよう。まず第一に，日本時代には，近代的医療行為が導入され，衛生思想の徹底化が図られた事実を指摘しなければならない。村々には「公医」がおかれ，病気治療の任務にあたり，彼らを通じて医学的な知識が村人の間には広がっていった。その結果，たとえば，マラリアはアノフェレス，つまりハマダラ蚊がマラリア原虫を媒介することによって生じる伝染病だという知識が，知れわたった。

戦後になっても，医療知識はたえず外部から導入され，たとえば胃かいようはストレスに原因するという学説は今では常識化したくらいである。実際にも各村には「衛生所」が設けられ，風邪，関節炎，下痢などの症状については，投薬や注射による治療が試みられている。こうして簡単な病気については，近代的な治療法がもっとも効験あらたかな方法として認識されるようになったのである。

キリスト教，とりわけ長老教と天主教の布教は戦後まもなくの頃に本格的に開始されたが，この宗教は徹底的に旧慣の破棄を村人に迫った。初期の頃の布教政策は，衣類や麺包(パン)などの食糧を分配して信徒を獲得するということであったので，「麺包教」と陰口を叩かれもしたが，またたくまに勢力を拡大し，村人をいずれかの宗派の信徒とさせてしまった。この宗教は異郷の神々の存在を許さず，定着するにしたがって伝統的な民俗行事を攻撃し，その撲滅を図った。とりわけ長老教は「迷信」の打破に積極的であり，こうして病気治療にさいしての呪術的行為は影を潜めた。

この経過は末成道男の報告したピューマ族の辿った軌跡とは違っている。ピューマ族は台湾の少数派集団の一つだが，彼らの間にもキリスト教は同じ頃に浸透していった。しかし，ピューマ族ではキリスト教は根を張らず，いとも簡単に人々は脱キリスト教化してしまい，伝統的な呪術の世界が復活した。そうなったいきさつには当然のことながら，理由がある。もともとピューマ族には祖先祭祀の慣習がみられ，祖先の祀りを疎かにすれば病気になるという信仰が根を下ろしていた。キリスト教はこの祖先祭祀の世界までは踏み込めなかったようであり，それだから，「治りにくい病気は，祖先を捨て異国の教えに入った祟りとして」考えられ，こうして病気治療の動静が常に脱教の動機になっていた〔末成道男　1983：383—413〕。

この点で，つまり出自意識を欠き，祖先祭祀の性格がまるで異なっていた点で，ピューマ族とタイヤル族とではかなりの相違がある。そうしてみると，タイヤル族を担当したキリスト教の布教者は幸運だったというべきかもしれないが，それはともかくとして，実際は，呪術的儀礼行為は姿を消してもそれを支えていた観念の世界は残った，と主張してよいと思える。キリスト教は魂の救済者として登場し，聖書の物語や教義は，毎週，教会で語られているが，そのことだけでキリスト教がタイヤル族の日常生活の中に浸透していったのではない。

キリスト教は，病気の原因を「悪魔」のせいにしたわけではないが，やはり病気治癒を大きな目的としていたことには変りない。長老教の熱心な信者は，「キリストを信じればガンも治る」と筆者に語って聞かせたことがあったが，それよりも，次に記す事実には十分に注目しておくべきであって，それは，病気が重くなると宗派を問わず病気治癒の祈願がなされるという事実である。ここでは，天主教と長老教との，それぞれの教会が病気治癒のために祈祷文を作製している実例を一つの

見本として示してみよう。

最初の文案は，天主教の伝導師が，重病で床に伏している患者に対して安らぎを与えるためにしたためた漢文での祈りの言葉と，それを村人がカタカナ表記にてタイヤル語に翻訳したものである。ただしカタカナ表記の下に対応させた日本語は筆者の挿入である。

主耶蘇基督
願我領受了祢的聖体聖血，因祢的仁慈，身心獲得保障和治療，而不受到裁判和処罰。
キリスト
マガホボウ　チ　イソ，　ハニヤン
お願い　あなた，　もう
タイホク　キ　コエン　コ　ヘヘヘ
着きました　に　私　は　体
ソ，　ロ　ラモー　ソ，　モサ
あなたの，　と　血　あなたの，　行く
ソンババシェク，ヤカー　シ　コエン
治療，　しない　に　私
パパスラハガン，ヤカー　シ　コエン
裁き，　しない　に　私
タシガガビラン
罰

病気治療にさいして神に祈願することは，長老教とて変りがない。次に示すのは，長老教会の黒板に日本語にて書かれていた「病気見舞唄」を原文のまま転写したものである。

写真一　長老教会での「病気見舞唄」

病気見舞唄
1　主よ今の時間私は祈ってる
　　主よ私は罪の　女よ
　　男
2　許して下さい　主イエス様よ
　　いやして下さい
　すべての　罪よ　今から私は
　　病気よ
　神の子供よ
1　許して下さい　主イエス様よ
2　いやして下さい
　すべての　罪よ　今か
　　病気よ
　私は神の子供よ
　あ…あ…あ…あ…今から私は神の子供よ

このような病気治癒の祈祷は，患者を前にして牧師や信者が集まり祈りを捧げ，かつ唱いながら，治癒のことばを重病人に投げかけるという形式をとっている。昔ならホムゴップして神意を伺い苦痛を和らげたことであろうが，さしずめこのキリスト教のばあいだと，ことばによる祈祷が病いの救済手段になっているといえるだろう。ここにみる長老教の「病気見舞唄」はそのことばによる治癒祈願の例だが，切実に病気治癒を願った気持ちがほとばしり出ているのが感じられる。だがよく考えてみると，罪人であるこの世の人間が神・キリストに祈願して病気の平癒を願うとは，昔のホンゴップの考えとなんとよく類似していることだろうか。もちろんキリスト教は異教の神を拒絶するので，病気をもたらすのは「悪い神」だという伝統的な神観念を排撃するのだが，薬も効かない重病人に対しては治癒祈願を積極的に試み，そして心の平安を求めるのである。

もちろん，病気になっても，どの社会にも虚勢を張って医者に通わない病人はたくさんいるし，酒で一時的に痛みを和らげる人もいるだろう。酒が一時的にせよ痛みを和らげるなら，これこそ「薬」といってよいのかもしれないが，あまりうがち過ぎた意見はさておくとして，多くの人たちが「西薬」（近代医薬）に依存し，痛みを除去しようと苦心していることは確かである。「西薬」に依存するのは，それがてっとり早く治るからであるけれども，それでも直らない病人はたくさんいる。もっとも貧困のため医療費を負担しえず，

医者にかからず病状を放置しておく村人はけっして少なくはないし，そのため生命が断たれてしまうばあいがしばしばみられるのだが，そのような状況に行きついたとしても，なおかつ医師との関わりをもたず，神頼みをし，心の平安を望む患者は少なくないのである。このような病人は，かつてなら呪術に頼って心の平安を求めたことであろうが，今ではキリスト教の祈祷に頼って安らぎを得ているということになる。

時代は大きく変わった。ホムゴップの祈りからキリスト教の祈りへという変化は確かに大きな様変りである。しかしながらホムゴップによる治療にせよ，あるいはキリスト教の祈祷にせよ，痛みを和らげ心の平安を取り戻すことがそれらの目的であってみれば，いずれも病気の根本的治療であるということができようし，したがってホムゴップの呪術とキリスト教の祈祷との間にはさしたる隔たりはなかった，というべきなのかもしれない。元来，タイヤル族には祖先が祟るという観念は存在しておらず，異国の神を信じても祖先の祟りがなかったので，人々は安心してキリスト教に入信できたことだろう。ピューマ族と比較してこの落差は重要な意味をもっているというべきだが，ひとたび入信してみて，キリスト教が病気治療の祈願をしてくれるかぎり，昔ながらのホムゴップがなくとも，人々は生きることに最後の望みをかけることができる，と思い続けたにちがいない。

引用文献

田上忠之　1935『蕃人の奇習と伝説』台湾蕃族研究所，台北。

末成道男　1983「台湾プユマ族の治療儀礼にみられる志向性」『儀礼と象徴（吉田禎吾教授環暦記念論文集）』九州大学出版会。

山路勝彦　1984「台湾タイヤル族の日常の生活圏と人間集団の分類」『関西学院大学社会学部紀要』49。

———　1986「タイヤル族の慣習法と贖罪，祭祀および共同体」『関西学院大学社会学部紀要』53。